小説現代新人賞全作品 ①

代
新人賞全作品 1

講談社

小説現代新人賞全作品1
定価＝一二〇〇円
著者＝中山あい子ほか
昭和五十三年四月二十五日　第一刷発行

発行者＝野間省一
発行所＝株式会社講談社
東京都文京区音羽二―十二―二十一　郵便番号一一二
電話（〇三）九四五―一一一一（大代表）振替東京八―三九三〇
印刷所＝豊国印刷株式会社
製本所＝藤沢製本株式会社
©中山あい子ほか　昭和五十三年　Printed in Japan
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

0093-305538-2253（0）　（文2）

小説現代新人賞全作品1　目次

■第一回受賞作品　昭和三十八年下期
優しい女　中山あい子　5
■第二回受賞作品　昭和三十九年上期
山風記　長尾宇迦　33
■第三回受賞作品　昭和三十九年下期
寸法武者　八切止夫　55
■第四回受賞作品　昭和四十年上期
地の炎　竹内松太郎　87
■第五回受賞作品　昭和四十年下期
悪い指　伏見丘太郎　119

■第六回受賞作品　昭和四十一年上期
さらば　モスクワ愚連隊　五木寛之　149
媼繁昌記　藤本泉　179
■第八回受賞作品　昭和四十二年上期
巨大な祭典　佐々木二郎　207
■第九回受賞作品　昭和四十二年下期
ひ　げ　高橋宏　235
選考委員であった頃　源氏鶏太　263

本巻収録作品　選考委員一覧

第一回～第四回
有馬頼義　石原慎太郎　源氏鶏太　柴田錬三郎　松本清張

第五回～第七回
有馬頼義　北原武夫　源氏鶏太　柴田錬三郎　田村泰次郎

第八回～第九回
有馬頼義　北原武夫　源氏鶏太　司馬遼太郎　田村泰次郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小説現代新人賞全作品 1

イラストレーション　中原　脩
ブックデザイン　村上豊夫

■第一回受賞作品

優しい女

中山あい子

受賞の言葉

何時か、自分も受賞の言葉を書くことがあるのだろうか、書きたいものだと思った。

その晴れがましさは少し面映ゆいけれど、やはりとても嬉しいにちがいないと思った。

それが実現したいま、私はまだぼんやりしている。嬉しいとか、よかったとか、そう言う実感は、もっと後になってやってくるのであろう。出たい出たいと切望していたレースに出してもらえた補欠選手のように、私はいま、少し蒼ざめて、とにかく走り出さなければならない。

観衆のざわめきと、高く晴れた秋空とに挟まれて、緊張している小学生のような私を、不安に充ちてみつめる友人たちのためにも、せっかく選んで下さった方々に対しても、私は美事に走りたい。いまはそればかり考えている。有りがとうございました。

なかやまあいこ

大正十一年、東京生れ。活水女学院卒。「女流」同人を経て「炎の会」を主宰する。受賞作は「いわゆる優しい女の生態がうまく描かれ（中略）第一回の授賞作としては申し分がない」（源氏氏）と賛辞を得た。受賞後も中間小説誌、婦人誌等で活躍している。著書に『奥山相姦』『春の岬』『旅の終りのかもめ鳥』などがある。また『女が殺意を抱く時』等のエッセイ集もある。

理性で感情を殺して、じっと耐えて生きて来ました、と云うのが大島徳三の口癖であるが、そんな彼にも殺しきれない欲望はあったわけだ。五十五歳の時、なつ子に手をつけてしまった。

徳三が永年つづけて来た古着屋商売に見切りをつけて、当時としては新しいアイデアであった貸ビル事業を始め、その最初の小さなビルの管理人として応募してきた婦人の中から気立ての良さそうな未亡人を選んだのだが、それが近藤なつ子であった。

なつ子は八つになる女の子を連れて、四畳半の管理事務所に住み込み、ほっとしたらしく、この小さな住居を大切にしていた。

徳三の目に狂いはなく、なつ子は全てにひかえ目な物優しい雰囲気で、彼を満足させ、教育もあるらしく任せきりにしていても金銭にうるさい主人の徳三の気心をのみこみ正確に帳面をつけるし、貸事務所の各社からの受けもよかった。

徳三は永年つれ添って来た妻を、下宿の小母さん、と呼ぶほどで、子供が出来ぬ女房の冷たさをかこっていたが、とにかくそれまでは理性で殺しつづけていたものがあったわけである。殺しつづけている中に、彼は観念的に非常に好色になっていた。

そう云う潜在意識が、家でやる商売をやめて外に出る口実として全然方向ちがいの仕事をさせたのかも知れない。

なつ子はちらりちらりと徳三から投げられる好色な目を意識しても別にさけようとはしなかった。せっかくの職場を捨てるほどそれが重大な意味を持つとは思わなかったらしい。

死んだ夫との五年余の生活で、彼女には男が全く必要でなくなったとも思われぬ。三十五と云えばいわゆる肉体の爛熟期にあったわけで、二人の関係は相寄る魂と云うよりはむしろ相寄る肉体であったかも知れないのだ。

骨っぽい大女の妻とは違い、丸味を帯びたなつ子の小柄な可愛らしさは、徳三を溺れさすに充分であった。

無抵抗な女の柔軟さを、徳三は無節操とはとらず、自分への愛だと思う甘さがあった。

徳三は心底からなつ子を愛しがった。

その愛が彼女を満たし妊娠させたと思う時うろたえるより先に歓喜があった。

子供はあきらめていた矢先きである。そうなってみれば、無上に欲しかった。

でも奥様が——と、なつ子はためらった。

全財産をやって別れよう。と徳三は青年のように気負ってみせた。

まだ俺はいくらでも一身上つくれる自信はあるんだから。とも云った。

社長がそうおっしゃるんなら、と観念して目を閉じるな

つ子を抱きしめて、彼は生れて初めてのような心のたかぶりを感じた。
全財産も何もいりません。
妻は冷静にそう答えた。
生れた子供は引取って私が育てましょう。
まったく下宿の小母さんか寄宿舎の舎監のようなゆるがない態度に徳三はたじろいだ。
うろたえぬ妻の態度を、親類中でほめたたえ、あれほどの堅物をたらしこんだ女としてなつ子は結局、日蔭の身となった。
いくら徳三がなつ子を愛したとしても、いい年をして社会秩序を足蹴にすることは出来なかった。
なつ子には別に家を与え、生活の心配のないよう、徳三の叔父たちが中に入って、新宿にパチンコ屋を買ってやった。
結局あの女は得をしたのさ、と人々は後になって噂した。
生れて一年足らずで、男の子は徳三の家に引きとられ、妻の子として入籍した。
原則として、なつ子とは切れたことになってはいたが、それを妻のふじのが何処まで信じていたかは不明である。
子供に夢中の徳三は夕方にはきちんと帰宅して唯ひたすらに自分の分身をみたがる様子だったが、だからと云って女と会うことがなくなった訳ではなかった。
彼が一日中、ビルにいる必要はないのだから、なつ子の新しい住居に行かないなどとはふじのでなくとも信じはしない。
ふじのは少しも変らなかった。チリ一つないように片づけ、みがきをかけた広い住居で、仏像のように無表情に幼児の世話をした。
こんな魅力のない老人を、本気で好きになる女なんているわけはない、と云う確固とした自信が、ふじのにあったのであろう。
唯、ふじのは自分が斯うしていることで本当は一度も愛を感じたことのない男と結ばれたことへの復讐をしているような一種の残酷な喜びを味わっていた。
その頃、女としての閉鎖期を迎えて、ふじのは、女の生涯の空しさのようなものにつき当っていた。冷感症だと云われても、自分としては女らしく水々しくなれなかった相手のために強いて女を粧う気にはなれないのだ。
誰にでも開く花のような女のなつ子を、別に憎みはしなかった。自分がそうしなくとも生きられたことでは生活力と責任感のある徳三に感謝してもいいと思っていた。その感謝で、夫の身の廻りをととのえ、自分も節度のある従い方をしなければならないとも考えた。子供に愛情があったかどうか判然りしないが、彼女の貫いた責任のある態度は人々にはそれが愛だと思わせる効果はあった。

徳三は自分がこれほど愛しているのだからなつ子も自然愛情深く自分に向っていると信じきっていた。事実、なつ子はたまの逢瀬には献身的であったし、子供を思う情の深

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

さは格別で、その哀れさに徳三は心をしめつけられた。
子供が三つになった時、ひそかに会わせてやろうと決心し、一日、ねえやを供にして動物園に行った。
しかし会わせた場所に、しょんぼりとたたずんでいたなつ子は、何時までも彼らの後について来て、愛らしく育った息子を喰い入るようにみつめていた。
徳三は自分が新派の舞台にでも立っているような悲壮感と充実感に酔った。
その後で、なつ子が男と池の端の料亭に寄ったことなど知る筈もなかった。
お前も一ぱしの役者だよ。
と男にこづかれて、崩れたひざの上に両手をのせ、身をくねらせるなつ子の姿には、最前の神妙さはなかった。
何て気楽な身分だろう。
そうはすっぱに答え、杯を重ねた。
この男を徳三は少しも疑わなかった。就職の時、なつ子の保証人になった下谷の弟と云うふれ込みで、彼は初めから信じた。
事実、なつ子には下谷に弟がいたのだし、唯、徳三はなつ子と不仲で絶交している本物に会っていないだけである。
この辺の手ぬかりは、徳三のような男にはない筈なのだが、愛は盲目のたとえ通り、彼はなつ子にうまく云いくるめられていたわけである。
もちろん、初めからなつ子は自分の運命を知りはしなかった。徳三をだましたのも、情人が時々自分をたずねて来る時のことを考えて体裁のよい口実にしただけであった。
この井沢彦太にしても、まさか爺さんが自分の女に懸想するとは思いもしなかった。
そうなってから湧いた欲である。
どうしよう、と云われた時、彦太の中では計画のメドは出来あがっていた。
爺さんを喜ばせてやれよ。
もちろん、なつ子は不服であった。だが若い男に捨てられるのはもっと嫌だった。
どうせへるもんじゃなし、俺はいいぜ。
彦太はそう云う男なのだ。三十過ぎと云うのに妻を持たず、画商の使い走りのようなことをし、計理士の資格に物を云わせ、時には法すれすれの線でサギめいたことをやってのける、遊び人タイプの男だ。
もちろん女としてなつ子一人ではない。
面喰いのなつ子が満足する風貌をして、その無頼さが、かえってなつ子には反逆児のような男らしさを感じさせるのだった。
一もうけしよう。と云われれば、男の機嫌をとりたい一心になった。
知らぬとは云え、徳三は、せっかくの理性を捨てたばかりにとんだ仕儀となった。
知らぬが仏とは、その親爺のことさ。
彦太の笑い声になつ子は少しおびえた。
彦太をパチンコ屋の支配人にするときいて徳三はむしろそれを喜んだ。

世間の目があるから、店の方へは顔も出せない、肉親の弟なら安心だろう。まして計理士である、そう考えたわけである。すべてに実直な徳三は必ずなつ子の許へ行く時は電話をかけた。

パチンコ屋の事務所は殆ど彦太に任せっぱなしだったから、なつ子が新大久保の自宅にいて、徳三を待つことは、当然彦太も承知のうえであった。

娘は中学へ上り、昼はなつ子一人の処で、徳三はくつろぐことが出来た。

お前さんをこんな日蔭の身にして本当にすまないと思っているよ。出来る限りはしてあげるからな、こらえておくれ。

そう云われると、なつ子は内心おびえ、この人の良い老人に相すまぬ気になり、それが優しい心づかいやら、気に入られようとあえぐ女の演技やらで、徳三の心をますますのめりこませるようであった。

私は幸せなんです。子供は立派な大島商事の後とりなんだし——と云った。

奥様にはいくら感謝してもしたりません。とも云った。

同じ女で、ああこうも違うものか。と云うのが徳三の感慨であった。

そんな日の夜は、彦太の方でも異常なほどなつ子を責め、なつ子はなつ子で気も遠くなる思いで歓喜をむさぼり、あの爺様ときたらいじくり廻すだけいじくりやがって、女を満足さすことも出来ねえんだ。と彦太は雑言を吐いてみせた。

なつ子はしなやかに光る身体を波うたせて彦太にすがり、この男を離すまい、とばかり思うようだった。

病気勝ちと云う徳三の妻のことを考えて、心底から、永生きして欲しいと思った。

妻が生きている限り、徳三はひそかにしかやって来ず、なつ子は安心してもう一つの情事をたのしむことが可能な筈であった。

ふじのがK大でみて貰って子宮癌の宣告を受けたのは、子供が五つの秋であった。

すでに五十二になり、ふじの自身としても子宮との別れに特殊な感慨もなくなったと云えば嘘になるかも知れぬが、とにかく即座に手術を納得した。

多くの場合、子宮癌は最も成功率が高いと云われているが、ふじのの手術も一応成功した。が、後がよくなかった。

いわゆる、ぶらぶら病のようなことになり、貧血、めまいが交互にくりかえされ、無口は益々無口となった。

何しろママには一流の博士がついているんだから、と徳三は云うが、いくら金の力を発揮したところで、どうにもならぬものはどうにもなりはしない。

宗教に入ったら——と徳三はすすめた。

ふじのはうす笑いを浮べてそれを否定し神とか仏と云うものにはすがらぬ、とはっきり云った。その代り、医薬にはおかしいほどの執念をみせ、一日の食事の種類よりも多

い薬を並べて、それを順よく口に放りこんだ。
徳三は、あっけにとられて、丹念に飲みこまれてゆく薬を見つめるばかりだった。
決して別れないと云ったように、ふじのは決して死なぬ気らしかった。
息子とも云えぬほどの幼い息子の洋一は、二人の老人を両手でさぐり乍ら、パパ、ママと馴れ親しみ、時には子供の笑いを二人して共有する或種の温みがないこともなかった。
奥様が丈夫になって、永生きなさるよう、そう云ったなつ子のことばは徳三を或いらだたしさにさそった。妻の死を希うほどのおぞましい神経にはなれないが、そうなった時のことを考えて、その幸せを想像しなかったとも云えない。親子水入らずで——と云う古い言葉は実に魅力的であった。
徳三の心の乱れは、ひどい頭痛となって現われ、やがては、気のつかぬ中に首がフルフルゆれるようになり、あのカン持ち老人の特徴で人々の印象に残るようになった。
今ではふえて五つになった持ちビルを廻って歩くと、使用人たちは、彼が来たことを、一寸首をふってみせることで知らせ合うらしかった。
ウチのこれが、と事務員たちは首をふって云った。
徳三は、なつ子に注意されても、劇薬に近い×××を常用して頭痛を忘れたがった。
精力増進に効くと云われれば何でもためしたがり、注意されると残りの火を消さないでくれ、とまで訴える始末だった。
助平爺さん、これで生命をちぢめてるのが分らんのだな、と彦太などは冷笑した。
あんたは良いな。男としてはそう云う奔放な生き方の方が本当だろうね。わたしなどは何時も何時も理性で押えて生きてきて、今になってうらたえるんだよ。
時々、彦太に会うと、徳三は人の好い笑いをうかべて、この情人の弟に述懐する。
あっちこっちで女ばかりこしらえて、と嘆くなつ子の姉らしい言葉にさからって、徳三は、男としてはそれが羨やましいと云った。
あなたも、もっと発展なさるといいのよ。と、なつ子は云う。
私はもうこんな年ですもの、もっと若い娘と恋をしなさいな。
本気で云うのかい。
徳三はやはり驚いてしまうらしかった。
わたしには、彦さんのような浮気は出来ないんだな。素質がないんだよ。羨やましいのと実行とは別さ。わたしの恋人はお前一人だ。
徳三は本当にそう思っているのだ。
私が浮気したら、どうします。
なつ子の言葉に徳三はぎょっとした。
お前はそんな女じゃないさ。
なつ子は、けたたましく笑って真昼の中で裸身を横たえ、この年で二人の男は無理だわね、と、はすっぱに云っ

た。
この年と云うが、四十過ぎたと云うのに、なつ子の柔軟な肉のしたたりは嘘のようだ。
浮気をしたら直ぐ分る。殺してやる。
何時になく劇しく徳三は身をもんだ。
なつ子が耐えている苦痛の表情を、徳三は女の歓喜の絶妙さとしか解せない。
お願いだから、私の上で死んでしまわないでね。となつ子はいう。
死んでなるものかとも思い、死んでもいいとも思う。徳三の歓びは肉ではなく精神の方に比重がかかっていた。
子宮がなくなったからというのではなく、そのずっと以前から、徳三とふじのに交渉はなかった。そのことで特に妻の方に不満があるらしくもなかった。
さばさばした顔付きの妻の存在が、実に確固としているのが徳三には解せない。
法律でしばられることの無気味と味気なさの中で、徳三は益々なつ子への思いを深め、本当は妻の病気に突然変異を願った。
それは悪魔への祈りにちがいなかった。
それが証拠に、妻は三年して再び入院してしまった。洋一は八歳、小学校の生徒であった。
癌が胃に転移していたときかされ、徳三はぎょっとした。妻の死を考え、それを瞬時にしろ希望したことで怖れた。
Y大病院の特等室は部屋代だけでも日に七千円はした。しかし辞退するふじのを押えて徳三はそれにきめた。
斯んな時のための金です。と云った。
今度の癌は、本人には知らされなかったが、ふじのがどの程度自分の病気を分っていたかは不明であった。
胆石だから、痛みがひどいのだ、ときかされて、ふじのは納得し、当分投薬で様子をみると云う医師を信頼した。
手術をすれば二パーセントくらいの希みはあるが、放っておけば三月もたぬだろう、と徳三の方は宣告された。
誰のつけた智恵か知らぬが、少しばかり生意気になった子供の洋一は、こましゃくれた口調で、ママは僕を生んでから弱くなったんだってね、可哀想だなア、と云った。
徳三がそれを告げると、ふじのはあたたかい目をして、あの子はそう思ってるのね。と云った。はじめて見る妻のあたたかさを、徳三は後めたさの中で認めた。この女の中で本当に押し殺されていたものの重みが分るような哀れな気持ちであった。
石をとってしまえば嘘のように楽になるそうだよ。永びくよりいいかも知れないから、手術をして貰ったらどうかね。
ふじのはしぶった。
二度も腹を切るのは嫌だわ。と云った。
そう言う訳で、当分そっちに行けない、と電話をすると、なつ子は、許されるなら、寝ずの看病をしてあげたい、と云った。
徳三は胸をあつくして受話機をにぎりしめた。あの優しさこそ俺を支えるものだ。と思った。

資産一億！　いよいよ時期到来か。
その夜、彦太はそう云った。

なつ子は生れて初めてと云っていいほどの悩みに直面した。
いい加減の男とは云え、彦太はそこら辺にいる平凡な男たちとはケタが違って優秀な頭脳の持主だったし、良い男だった。
彼は他の女たちとも遊びだけで、決して唯一人の者を決定しなかった。なつ子にしてみれば、いくら自分が年上とは云え、二人の仲は十年近い。夫の生存中からなのだから、腐れ縁と嘲笑されても、悔いはない。彼が結婚の形をとって落ちつこうと望む時、その相手は自分以外にないと思っていた。
時期到来か、と云われると浮足立ってしまうのだ。正式に大島徳三の妻となることは、永久に彦太との公明正大さを夢見ることを拒むことになるのだ。四十五になって、五十になって、愛したと云う思い出だけに埋没して生きてゆけるだろうか。寂しさの増すばかりの心地だ。
徳三の妻が奇蹟的に助かることを熱望した。
その異常な関心は、徳三に益々なつ子尊重の心をうえつけ、なつ子の二心ない、まるで昔の忠臣のような気っぷに彼は感嘆するのだ。
手術の前に女二人の対面をさせてやりたいと思うほど徳三はほろ甘い雰囲気に沈溺した。

手術をひかえて沈み勝ちな妻の前へ、女を連れてゆくむごさを、徳三は叔父に指摘されるまで気がつかなかった。
ばかも休み休みにしろ、と云われた。
芝居してる訳じゃなかろう、とも云った。
一言もなかった。物事には時機があり、順序がある、と説得されて帰った。
その次第を、彦太に告げながら、徳三は電話口で、しみじみとこの男に向って、私は罪深い人間だ、と云った。舌を出しかねない彦太の心をもちろん知りはしないのだ。
とにかく此の叔父に万事任せてあるから、逆らうわけにはいかない。その代り、姉さんのことは引受けてくれたから――と徳三はこの弟に対しても遠慮がちであった。
姉ほど幸せ者はいませんよ。と彦太はこたえた。彦太にしてみれば、徳三となつ子は手放してはならぬ宝庫の鍵だったわけだ。
なつ子の不安を他所に、事実は彦太の望む方向に進んでいた。
あたしは貴方と正式な仲になりたいと思ったこともあるのよ。と、なつ子は云った。
そんな感傷は疾うに捨てたはずだぜ。二人して始めた事業がいよいよ完成しようって時に肝腎のあんたが弱気だと困るがね。
彦太は案の定の返事をした。
何も変りはしないさ。今まで通り、俺は下谷の弟さ。出入りは自由だ。何の不便もありはしないよ。
一時に二人の男の物だなんて、もうあきあきしちまった

のよ。
その中一人になるさ。老先き短い相手のことだ。爺さんも云ってたぜ、物には時機と順があるって。
あんた、本当に誰とも結婚しないわね。
ああしないよ。あんなくだらん制度に屈するほどぼけてはいません。
なつ子は少しは安心もし嬉しくもあったが、何だかこの男には一生云いくるめられてしまうのではあるまいか、と云う心配もあった。
ふじのの入院後、徳三はなつ子の処へ来ていなかった。何時も居場所をはっきりさせておかなければと云う懸念から、徳三はいささかの真心をやがて死ぬ妻のためにさくことで自らを慰めていた。
こんな立派な病院の特等室で、大博士にみて貰うなんて、もったいない。とふじのはよく言った。二人の附添いの中、一人は病人と同年輩とおぼしい女で、手持ち無沙汰な顔つきで、いこいを吹かしているところは、波乱に富んだ女の半生を語るような印象をふじのに与えたのであろうか。
奥さんは幸せもんですよ。真面目なダンナさんで、あの年で、ああして毎日会社の帰りにお寄りになるなんてまるで新婚さんだわ。
と、その女は云った。
静脈注射のしにくいふじのの腕は、細くしなびて、あちこちに針の跡が黒くしみをつけていたが、そこを一々さわってみている徳三を見上げていると、ふじのはその寂しそうな夫の老いた目尻に深い哀れみを感じた。
こんどなおって帰宅したら、もっと暖かく妻らしく接しようとまで考えた。
徳三は、妻の死を知っていたが、妻の方では、露ほどもそれを知覚しなかった。
生きようと望み、生きていて欲しいと望むふじのとなつ子の間にいて、徳三は独りの考えの中で希望を新しくきずいていた。
或日、三時間余の大手術が終った。

永い眠りから覚めて、明るい窓のカーテンのそよぎを目にした時、ふじのは溢れる思いに胸をつまらせ、涙を流した。
鼻にさしこまれたものや、天井から下げられた輸血の仰々しい装置、横たわっている太い酸素ボンベ、そんなものにがんじがらめにされ乍らも、自分が目をあけて太陽の光りを見ていると云う喜びは大きかった。
気がつかれましたね。と若い附添婦はいそいで医長を呼びに行くらしかった。
年とった方の女は、冷たいおしぼりでふじのの涙をふいてくれた。
もう八時間も血が止らないのだときいて、ふじのは目まいがした。
でも大丈夫、血はいくらもあるんだから、止るまでは輸血しますよ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com